

学校選択制について考える（４）――廃止を決めた杉並の声

学校選択制学校選択制の廃止を決めた杉並区では、2011年7月に学校選択制（学校希望制度）についてアンケートを実施しました。学校選択制を10年間実施してきた結果、どのような弊害が出ているのかははっきりとあらわれています。

アンケート結果では、学校選択制の「継続」27.5%、
「廃止」38.1%、
「見直し」34.4%

で、廃止と見直しを合わせると約73%にのびます。

「廃止」とする38.1%の中での主な理由では、「地域とともに学校をつくるため」が最も多く、次に、従来より実施している「指定校変更を柔軟に活用して対応可」、続いて「学校間格差解消のため」となっています。

また、「制度に対する全般的な意見」を記述式で書く欄には、制度の弊害がたくさん綴られていました。『杉並区学校希望制度検討会』報告書（2012年3月）から抜粋します。

学校関係者に対するアンケート結果（2011年7月実施）

1 学校希望制度は制度開始から10年を迎えました。この間の学校を取り巻く状況等を踏まえ、制度に対する全般的なご意見をお聞かせください。

主な積極的意見

- ・ 特色づくりの点で効果的、学校が活性化、独自色を打ち出し努力している
- ・ 基本的に味大きな問題もなく、広く定着している制度であり、撤廃は考えにくい
- ・ 健全な競争原理が働き、熱心に学校改善に取り組むようになった
- ・ 子どもやの個性や各家庭の事情に合った学校を選択できる制度は良い
- ・ 地域と一体となった教育活動、特色ある教育活動と希望制度は関連性があり、見直しは他に歪みを生じる
- ・ 学校の存在が地域に浸透し、保護者が学校教育を考える一つの契機になっている

主な消極的意見

- ・ 地域とのつながりが希薄で、公立のよさが半減しており、学校間格差が広がったため学校・保護者の負担が大きい
- ・ 地域運営学校、小中一貫教育など地域との連携を強化する政策との間に矛盾を感じる

- ・希望制度で学校選択権を保護者に与えているが、地域の支えあいの精神、安心感、一体感を奪うに等しい
- ・地域で育てる学校といいながら、地域の努力が活かされていない
- ・小中一貫教育やCSなど、学校が地域コミュニティの拠点という方向性や合理性から整理が必事
- ・魅力ある学校、開かれた学校は全体的な取り組みで十分達成できた
- ・児童数増加、教室数不足が懸念されるほか、遠距離通学の児童の安全面が心配
- ・公立学校間の競争原理よりも、公立学校の品質と向上心を持ち、どの学校へ通学しても安心な状況を作ることが重要
- ・単学級という理由で他校へ流れる事実があり廃止するしかない
- ・教育活動内容よりも友達関係等や設備の優劣など目に見える要素だけで選択している
- ・私立の滑り止めとしての役割を担っている
- ・制度維持のために児童の学習環境が損なわれている希望制は疑問
- ・選択できる点のみが周知されており、選んで終わりでは意味がない
- ・希望制度は公立小学校になじまず、小学校での選択制は見直すべき
- ・生徒数が増えたことが良い教育環境とはいえず、特色があまり見えない
- ・希望制度の実施は、結果として児童の取り合いように見えてしまう